

戦国女子高生奇譚

本能寺の恋

新城明

ARAKI AKIBA



戦国女子高生奇譚

本能寺の恋



新城
明

ARAKI AKIBA

ついに刊行!
チェックだ、この一冊!!

修学旅行先の京都でタイムスリップした女子高生
行き先はなんと本能寺の変前日だった!

戦国女子高生奇譚
本能寺の恋

新城 明

ARAKI AKIRA



Animelements

Presents

装
画

雾
威

『我らが知っていることは、その声だけでなく、その名だけで万人を戦慄せしめていた人間が、毛髪といわず骨といわず灰燼に帰さざるものは一つもなくなり、彼のものとしては地上に何ら残存しなかったことである』

この一節は織田信長本人とも謁見した、当時日本に来訪中のポルトガル人宣教師ルイス・フロイスがその著書『日本史』に記載した信長の最期である。

ルイス・フロイス著 『日本史』 第五十六章 第二部四一章より抜粋

(訳書 完訳フロイス日本史3 織田信長篇Ⅲ ルイス・フロイス 松田毅一・川崎桃太訳 中公文庫)

序

プロローグ	11
第一幕 目覚め	21
第二幕 キセキ	31
第三幕 ユウカ始動	51
第四幕 本能寺で大変	59
第五幕 ユウカ疾走	71
第六幕 敵は本能寺にあり?	79
第七幕 第六天魔王織田信長	97
第八幕 時は今、雨が下しる五月かな?	119
第九幕 阿修羅となりて	133

破

第十幕 ユウカ頑張る	147
第十一幕 敦盛	165
第十二幕 友情スイッチ	181
第十三幕 夜	201

急

第十四幕	歴史のスキマ	219
第十五幕	ものふたちのゆめ	227
第十六幕	愛と平和	235
第十七幕	決意	247
第十八幕	本能寺の変	261
第十九幕	追憶	321
第二十幕	最後の戦い	331
第二十一幕	二十一世紀	361
エピローグ		371
あとがき		375

序

鬱陶うつとうしい梅雨つゆが明け蟬せみの鳴く声が夏を告げたその日、のちに新聞の小さな見出しを賑にぎわすあ
る事件が発生した。

言うなればそれは来るべき歴史の理ことわりであり、摩訶不思議な謎に彩いろどられた出来事の発端だっ
た。

その事件とは、

修学旅行先の古都京都で起きた失踪事件であり、それはあたかも因果に導かれし運命さだめであつ
たかの如く古いにしへへと誘いざなわれたのだった。そして理りの当然こよみに暦こよみに刻まれてゆく様は、まるで人智の
想像を遥かに超えた何か得体の知れない神秘的な力によつて操あやつられていたとさえ言えるのだ。

さあ今、これらの謎を解き明かしその記録をここに綴つづろう。この失踪事件の先に待ち受けて
いたものが日本史史上他に類を見ない最大にして稀有けう、古今未曾有ここんみぞうの重大事件であつたといふこ
とを。

プロローグ

*** (愛子)

私は小川愛子16歳、都内の私立穂蘇川女子高に通う高校2年生、我が校は文武両道で少しは有名な一応進学校。生徒全員、部活に勉強に励んでいます。

とは言いながら思春期特有の感情なのか、漠とした未達成感或いは曖昧な不満足感にさいなまれることもしばしばで傍目には悩みも無く毎日愉快に過ごしているように見えるかもしれない。私の高校生活にも実はちよつとした虚無感は存在している、簡素に言えば物足りなさつてところ。「はああ」と、溜息をつきながら頬杖ついて窓際の席からボーっと校庭を眺めることも不完全な私には大事なことなのかもしれないし、答えが不明な物事にジレンマを感じ悩んだつてそれが青春というものだ、と言いついて聞かせているのかもしれない。

そんな私は、実はある個人種目では少々名の知れたアスリート。日頃から一心不乱に打ち込むことで、かの虚無感を払拭しようとしていることは間違いない。

さて、私が励んでいるのは何かというと、それは剣の道、現在関東大会九連覇中。剣の達人である祖父が営んでいる道場で物心付く頃には竹刀を握り、爺ちゃんにみっちり鍛えられたこ

もあつて男子にも結構余裕で勝つちやう始末でこのまま強くなつていいものかと乙女心を悩ませることもある。中学の頃なんて「猛者」つてあだ名つけられて、かなりシヨックだったこともあつたけどもう昔の話と笑い飛ばそう。

『キーンコーンコーンコーン………』

「よし、今日の授業はここまでだ、すぐに掃除してH Rだぞ。明日から修学旅行だ。今日は早く帰つて明日の準備をしるよ」

授業中だということをつっかり忘れていたけれど、担任の荒木先生が言うように明日から修学旅行だ。青春の枯渇感を潤すには絶好の良いイベントだと思う。

翌日が修学旅行でありその日の部活は休みだったので学校の武道館には寄らず祖父が営む道場へ足を向けた。木造で古風な造りの道場に着くと、少し長めの黒髪をサラリとなびかせ、使い込まれた引き戸を開く、その扉の間から射した太陽の光が映し出したのは爺ちゃんが正座し瞑想している姿だった。すぐに私に気付いた爺ちゃんは座つたままゆつくり目を開くと、膝に置いた手をおもむろに私へ向け人差し指だけを動かす動作で手招きする。道着にも着替えず夏服の制服のまま、ささと早歩きで移動し爺ちゃんの前に正座した。いつにも増して真剣な表情の爺ちゃんの鋭い眼光が突き刺さる。

どうかしたの？

「愛子、お主どうしても行くのか」皺くちや顔の爺ちゃんが眉間に更なる深皺を寄せた。

何？ どこに？ 爺ちゃんが何を言い出したのか解らない。

「明日の事じゃ」放り投げるように言う爺ちゃん。明日？ 一瞬小首を傾げた。が、

「……ああ、もしかして修学旅行のこと？」返答してみると、正解じゃ。と、言わんばかりに堂々と頷く爺ちゃん。対し私は、行くに決まつてるでしょ。と、なに言つてんの顔で応酬。

すると、

「そうか、ならば仕方が無いこれを持ってゆけ超最上大業物じゃ」爺ちゃんは自身の傍らに置いていた、本物の刀を内部に仕込んだ自慢の仕込み杖を差し出した。

あのねえ……、孫娘を心配してくれるのは大変ありがたいんだけど、修学旅行くらい普通に行かせて、そんな刃物を持つて行ける訳ないでしょ。

翌日の修学旅行出発当日の朝は「愛子おおおお」と近所迷惑なほど自慢の大声で叫ぶ爺ちゃんをダッシュとフェイントを駆使して振り切り三泊四日の修学旅行へ何とか出発した。

ということ、修学旅行一日目は新幹線でお昼頃京都駅に着いて午後から清水寺や金閣寺などをクラスのみんなとバス移動で観光し夜は駅前のホテルに宿泊。そして2日目が見望の自由行動の日、朝7時からみんなで朝食を取り8時にはホテル1階のロビーに集合していた。昨夜、女の子同士の恋愛話に花が咲き夜更かししたせいで少し眠い。

「騒ぐな騒ぐな、皆注目。今日は皆が楽しみにしていた自由行動の日だ。節度を守った行動をとるように」担任荒木先生が鼻息荒くルール説明。そして、

「特にユウカ！ わかつてるな」先生はいつもの極め台詞。

「んっもう、なんでいつつもアタシばっか。荒木の奴、アタシに惚れてんじやないの」

うちのクラスでは定番の荒木先生による鉄板オチにクラスの皆が笑う中、クチビルを尖らせ膨れっ面で腕組みするツインテールの可愛い彼女は、同じクラスで隣席の親友茶々山ユウカ。クチは悪いけど実は純情な英国帰りの帰国子女で面倒見のいいお人好しってところ、そしてけっこう巨乳なのよっ、これが。

「それから6時まででにこのロビーに集合だぞ、朝の6時じゃないぞ夕方6時、18時まででこのロビーに集合だからなっ」荒木先生から追加ルールが発表され、

「くっだらねえことばっか言っつて、なんか荒木のヤツ張り切っちゃって面倒くさくねえ？ そう思わない愛子」ユウカは片方の眉尻を上げた。

ははは、そうかもね。

「おいそこユウカ、愛子、きちんと聞いているか。18時集合だぞ忘れんな。あと生徒手帳は必ず身につけておくこと、わかったな」

「はぁーい」

「それとユウカ、おまえ今日、日直だから帰って来たら部屋の点呼とか委員長の桜井に協力しろよ」

「ハイハイハイハイ、わかつてるっつーの、いちいちムカつくメタボメガネめ、修学旅行にま

で日直持ち込むなっつーの」ユウカはアヒルのように口をクルンと尖らせた。

自由行動のこの日、私はユウカとふたり京都散策を計画していた。

ホテルを出て、午前中は西本願寺の大きいお寺を見て驚いて「デカッ」

お昼は和風のお店で一寸贅沢ちよつとな京料理の昼食ランチに舌鼓を鳴らし「ウマッ」

午後は新撰組で有名な壬生八木邸で当時の鴨居の刀傷を見て「スゴッ」

そのあとは四条通りを東に向け、暑い中ふたりで歩いて「キツッ」

いちいち大きなリアクションのユウカに笑わされながら、彼女のあとをついて行く私は実をいうと歴史音痴の方向音痴なので観光ルートはユウカに任せっきりになっていたのだ。

「ねえ愛子、やっぱ京都って素敵だよ、歴史を感じるってきつこういうことなのねえ」ユウカは両手を広げ宝ジェンヌき又よろしくオーバーアクションで一回転しながらニッコリ笑いポーズを極めようとしてコケた。ユウカ大丈夫？

「確かに古い建物とかあって風情があるって感じだね」私は言いながら転んだユウカの手を引き起こしてあげた。

「痛つつつつつつ、ありがとう」立ち上がりユウカは持論を展開「修学旅行は海外がいいとか、スキーがいいとかみんな言ってたけど日本人は、やっぱ断然京都でしょっ。断京、断京、断京、DKだねっDK。今度、DKって言い方、流行はやらそうっ。ねっ、愛子（ニコッ）」

——無理だと思つた。

この日は夏休み間近の7月中旬、青空に晴れ渡った夏日もいいところ。京都の夏は、めっぴう暑い。山に囲まれた盆地だから夏は暑く冬は寒いと、昨日のバスガイドのお姉さんが言っていた。

京都の街は古い建物が多い中、近代的なコンクリートのマンションなどもあるけれど街は全体的に建物の身長が低いせいとか空が高く感じられ確かにいい所だ。やっぱDKだと思った。

「でもさあ、昨日のお婆さんちよつと怖くなかった？」と、ユウカ。

ああ昨日の……、私はユウカの急な問い掛けにケータイのストラップを眺める。ユウカの言う昨日のお婆さんとは私たちが宿泊している駅前ホテルの近くで昨日偶然出会った占い師のお婆さんのことで、日本人離れした容姿のこのお婆さん、「危険が待ち受けるぞよお、ケーツケツケツケ、刻の剣のおぼし召しじや」と意味不明なことを言いながら紐ひもにつながられた水晶玉を強引に手渡してきたのだ。「要りません」って断ったんだけど、しつこく「過去、現在、未来、三界の印玉じゃ、刻の剣で削り出した、時の結晶じゃ」と、大声で叫んでうるさいし、只でくれたので「タダならラッキーじゃん高そうな感じだし」て、ユウカは喜ぶし、もう開き直ってこのビー玉サイズの水晶玉をケータイストラップにしていたのだ。

四条通りを北に折れ歩いていると、「ねえ愛子もうすぐ本能寺よ」

本能寺？ ユウカはいわゆる歴女で日本史に詳しく、私にいろいろと聞かせてくれるのだけど、私はやっぱり日本史は苦手だ。

「ここが有名な本能寺の址よ」へえ、そうなんだ。

本能寺址の石碑はひっそりと建っていた。ちよつと不思議な感じがしたのはこの石碑にお線香が束であげられていたこと、たつた今しがたまで誰かがお参りしていたようだ。ただ、この石碑はお墓ではないはずなのに一体誰が……、そんなことを考えながら辺りを見渡すとこの石碑の周りにはコンクリートの建物ばかりで見学できそうな古いお寺は見当たらない。

「ねえユウカ、お寺ないよ。本能寺ってもうないの？」

「一応あるけど今ある本能寺はサルが建て替えたものだからね」と、腕組みするユウカ。

サル？ うそつ、大工さんじゃなくて？ って顔を私がしたせいか、

「ああ、サルって秀吉のことね太閤秀吉、藤吉郎よ、藤吉郎秀吉。そのくらい知ってるでしょ」ユウカはにこやかに表情をゆるめ追加説明をしてくれた。が、

「……………」

「んんまあその本能寺も幕末には禁門の変で燃えちゃって建て替えられるんだけどねっ」

キンモンのヘン？

「ああ、さつき行った八木邸から新撰組がまだ壬生浪士組みぶろうしぐみって名乗ってた頃に戦いに参加したの、まあ実はまだアタシには幕末はちよつと難しくつて勉強不足なんだけどね」

いやいや、充分詳しいと思った。自慢じゃないけど私は既にユウカの言ってることの半分以上は解らない。

「この石碑はアタシの好きな森蘭様もりらんや第六魔王織田信長が亡くなった場所」

第六魔王？

「ああ、ええとね、この世の大魔王”って解釈すれば大同小異で異見はないはずよ」

へえ、ユウカはよく知ってるね。

「さっき見たガイド本に載ってた」

そうか。

「ちなみにこの石碑、本当は少しズレた場所に建ってるらしいんだけど、当時の本能寺は、まあだいたいこの辺りだったんだと思うよ」

「ふくん」私はユウカの言葉に触発され、そういえばホテルでゲットしていた京都観光案内マップをポケットから取り出した。ユウカの言う通り、今私達が居る本能寺址石碑から少し離れた場所に現在の本能寺というお寺が写真付で載っていた。観光マップの本能寺址石碑の解説文には『1582年6月2日、本能寺で織田信長が家臣明智光秀の謀反により殺された。光秀の謀反の動機は現在でも不明のままだ』と記載されている。確かに歴史的に捉えればこの解説文通りなんだろうけど、400年の時の隔へだたりは街を大きく変化させ、今ひとつピンと来ないというのが私の率直な意見だ。歴史にあまり興味がない私には詳しいことは解らない。ただ、

いま立っているこの場所で昔戦い傷つきそして死んでいった人がいると思うと、突然、過去の歴史に思いを馳せる感情が心の底から湧き出すような気分になってきた。こんな感情は生まれて初めてだった。

ユウカは昨日から観光地をデジカメで撮りまくっていたので私も負けじとケータイ写メで撮ろうと思い、お線香の煙が立ち昇るこの石碑の写真を撮っていると、その煙が目にしみて涙が出てきた、なぜか目眩めまいもする。なんだろこれ？　と思う間もなくケータイに付けていた水晶が白く輝きやがて光の渦うずとなり私を包み込む、「ねえ、愛子。どうしたの？　ねえ」というユウカの声が遠のいていく、こんなことは初めてだ。そして目の前が真っ暗、いや真っ白になり、私はこの21世紀から消えた。

試し読みいただき有難うございます。続きを読みたくなっていた方はアマゾンか送料無料、代金引換での直販にてご購入いただけます。
ご試読有難うございました。